東葛支部会報

第9号

千葉工業同窓会東葛支部

2004年2月1日

▲戸定歴史公園（松戸市）

東葛支部 ゴルフ大会で入賞逃す

去る10月8日に開催された本部ゴルフ大会は、総勢61名が参加。東葛支部からも5名が参加しました。

今年は、遠距離からの参加者の利便を考慮し、スタート時間を到着別にする調整をはかりました。

したがって、当支部の参加者の殆どは後半からのスタートとなりました。天候は、若干、風があったもののゴルフ日和に恵まれ、秋風のもと、清新な空気を満喫し、楽しい1日でした。

団体優勝は、地元であり、実力のある方が多い外房支部の4連覇となりました。

個人優勝は小林昶さん（36E）が獲得しました。

団体で当支部は第5位となり、残念ながら入賞出来ませんでした。東葛支部の参加者は次のとおりです（敬称略）。

青野和郎（24M）、宇賀野政次（25E）、立崎作次（26C）、木間英一（33C）、櫻井一三（33M）。

大会終了後、参加者によるチャリティ3万円を千葉日報福祉事業団へ寄付し、10月10日付けの千葉日報紙上で報じられました。

ゴルフ大会東葛支部参加選手

左から　青野、立崎、宇賀野、木間、櫻井（敬称略）

思い違いのまま終わりたかったこと

20C　竹内　昭夫

彼はランナー。

といっても、今は老いたる市民ランナー。

70歳を過ぎてからはレースに出るのも年に数回、今年はまだ地元の元旦マラソンを走っただけ。

それでも、彼は毎日の練習だけは欠かさない。怠けていては走れない。少しでも楽に走ろうと思えば、多少の苦しさに耐えておくことが大事だ。習慣で、いまはもう早朝の戸外に出るのも億劫ではない。

彼がなぜ走るのか。人の口を借りて語れば、「走った後の爽快感」とか「汗をかいて飲むビールの味」とか、そして「健康のため」、「多くの仲間との交流」等々、まことにその通りだが、彼にとっては何より増してマラソンに走った理由がある。

マラソンを通じて、人に勝つでもなく、負けるでもない、敢えていうならば己の内のもう一人の人間との競争を楽しめたことであった。

マラソンは持久力、持久力は忍耐、忍耐は自虐的だ。自虐性は、彼の中に鬱積した心の不安を解きほぐす特効薬的な麻薬であった。彼はそれに溺れて走り続けたのだ。

だが、彼はこの頃、自分の人生に大きな忘れ物を残して来た想いがしてならない。しかも取り返しのつかない失敗を重ねて来たような自身がさいなまれてならない。それは彼がマラソンの練習のために費やした時間の長さをふり返るときだ。

時々の休みをとるにせよ、仮に毎日1時間、いまだ続いている膨大な時間の量。そして歳月。

限られた人生の中で、この時間に見合ったもっと大事な選択はなかったのか。更に価値ある生き方の道筋は見えなかったのか。

早いはなし、何の足しにもならないこの長い時間、計算したらいくらになるのだ。あるいはこの長い間コツコツとモノ作りに励んでいたとしたら、一体何ができ上がっていただろう。

仕事で出世をしていたかも知れない。小遣いも少し貯まっただろうか。女房子供の機嫌もよくなっていただろうか。いまは間に合わないこんな想いに揺れるとき、彼はどっと落ち込む。

そもそもの彼の走りの原点はなにか。つまり何でこうなったのか。その一つに、あの検見川の街道から稲毛、千葉海岸を往復する冬の校内マラソンにある。あのとき彼は思いがけなく上位で還ってきた。それも鈴木照示（同級生・故人）にからまれ、「待ってくれ、先に行くな」と背中をつかまれ腕を引っ張られ、そのあげくもう走れないという彼を貝殻小屋（貝殻を粉砕してカルシウムをつくる小屋）に休ませたりして、ロスをしたにも拘わらず。

彼は思ったのだ。短距離はダメでもマラソンは強いのかも、そうだ、毎日下総中山駅までの自転車通学はきついが、脚も心臓も強くしてくれたのだ。鈴木の介抱なんかしないで走っていれば、入賞した久我達郎（同級生、後に千葉県立衛生短大教授）のように、陸上部から誘いがかかっていたかも知れないのだ。

そうだ、マラソンはいけそうだ。

この錯覚は彼の夢の中で、実に半世紀以上にわたって生きていた。しかしいまやっと世間のバブルとともに雲消霧散した。

校内マラソンの面映くも懐かしい思い出と少しばかりの後悔を残して。

さていま、静かな彼自身の周囲を見渡せば、趣味に多才な多くの隣人達が、羨ましいほど上手に余生を謳歌しているのを見る。彼らこそみなパンのた

めに働きながらも、心を癒す工夫をして来たからこそなのだ。

彼の場合はとんだ想い違いをしたマラソンであったが、それでも、屈折のあった彼の人生の、ある部分を修復するに少しは役立つこともあっただろうか。

あったと言っておこう、彼に気の毒だから。

下総牧の開墾と地名

25E　田　口　　昭

1. 板東武者と軍馬

板東武者が強かったのは、馬という強力な武器があったからです。馬にまたがって敵の中に乗り入れ刀をかざしてバッタバッタと薙ぎ倒したというのは講談の中のことで、実際は馬の足で蹴り飛ばして、踏みつけて今の戦車以上の働きをしたことでしょう。馬に乗っている武士が強いのではなく、馬が強かったわけです。

この軍馬の生産地が千葉県の「北総台地」です。

2.「四十里野」と呼ばれた小金原

現在、「下総牧」といわれているのは、佐倉牧と小金牧の二つで、小金牧は野田市中里から南は千葉市柏井町まで直線距離にして43キロメートル、最大幅は6キロメートルぐらいとなり、牧にそって周囲をはかると120平方キロメートルちかくにもなります。

このため「千葉野」とか「小金野」または「四十里野」といわれました。

3. 下総牧に関心をよせた徳川家康

天正十八年（1590年）家康が江戸城に入りました。

家康は「天下の主たりとして常に熟練しなければならないのは騎馬と水練である。この二つは人に代わってもらうことのできない業（わざ）である」といい、鍛練に励みました。このため、下総牧に関心をよせて直領地として代官をおいて運営させていました。

慶長三年（1598年）豊臣秀吉が死亡すると「野馬守り」といっていた者に帯刀を許して士分にして馬の生産に力を入れました。

4. 放牧地の開墾

幕府が倒れ明治新政府に政権が移ると馬の放牧地であった小金牧と佐倉牧は維新の混乱による窮民救済を目的とする開墾事業の対象地になりました。

この事業の企画は新政府ですが、実際には東京府下の豪商三井八郎右衛門・小野善助・西村郡司などが政府から二十万両を借りて下総開墾会社を設立し運営にあたりました。明治2年5月のことです。

開墾民は東京府下で募集され、旧幕臣・江戸の商人・工民など約八千人が応募しました。

こうして下総牧七千四百余町歩の開墾事業がスタートし、同年末から開墾民も移住を開始して最初の入植地が小金中野牧でした。

これが後の初富（鎌ヶ谷市）です。

5. 開墾地の地名（まとめ）

開墾地には地名がなかったので移住開墾の順序により、数字と美弥を組み合わせた字名（あざな）が付けられ、合計13箇所の地名が誕生したのです。

それでは当時開墾順に付けられた地名を書いてまとめとします。

- 初富（はつとみ）　鎌ヶ谷市
- 二和（ふたわ）　船橋市
- 三咲（みさき）　船橋市
- 豊四季（とよしき）　柏市
- 五香（ごこう）　松戸市
- 六実（むつみ）　松戸市
- 七栄（ななえ）　富里市
- 八街（やちまた）　八街市
- 九美上（くみあげ）　佐原市
- 十倉（とくら）　富里市
- 十余一（とよいち）　白井市
- 十余二（とよふた）　柏市
- 十余三（とよみ）　成田市

工業時代の想い出

32M　中村　軍治

私が千葉工業高校へ入学したのは終戦後9年目でした。

校門を入ると鉄道の線路があったり、貨車が並んでいたり、日本瓦の平屋倉庫の様で、とても校舎とは思えない学校であった。

でも教育レベルは高そうで、同級生が教壇に立って黒板に方程式をスラスラ解いて行くのを見て、田舎中学出の私がついて行けるか、不安に思った。

一番楽しみにしていたのは機械実習で、鉄板を切ってシャベルを作ったことであった。

手工具で切断し、ヤスリを掛け、曲げ、下塗り、仕上げ等、実習の時間が待ち遠しいくらいだった。(後に板金工場を任された時役に立った)

でも鋳造作業では、砂が直ぐに崩れ、中々鋳型が出来ず、俺には向いていないと悲観した。

旋盤作業では、センターが合わず、バイトの上に丸棒が乗ってしまい、削れるどころでは無かった。

本教科より専門科目に興味が有り、これで点数を稼いだ様であった。なにしろ殆ど復習をしていなかったし、試験の時は、一夜漬けの丸暗記であったから、科目が変更されたらパニくっていただろう。

数学も暗記だったので、答えが合っていても途中が間違えていたこともあったが、不思議と山勘が当たる事が多かった。

自動車部では「いすず」の6輪トラックを運転したが、ハンドルを何回も回さなければ曲がれず、変速のダブルクラッチも、身体が小さいので、座席の後ろに鞄を挟み、姿勢を整え乍らだから大変であった。

卒業後就職した会社は、学校へも機械設備を納めていた工作機械メーカーであった。

初めの頃の現場作業では、換歯車の計算に対数を使っていた。かけ算がプラスに、わり算がマイナスで計算出来、対数表から近似の整数に変換する方法であった。当時は、計算機も手動でハンドルをガラガラ回す物で、ルートを開くのは大変であった。

仕事の性質上三角関数も良く使った。

これも最初は対数で計算したが、電卓が出来て格段のスピードアップとなった。

社会生活で直面する課題や、人間関係では、漢文の「虎穴に入らずんば虎児を得ず」や「四面楚歌」の意味を実感したり、機械の取り扱い説明書の翻訳、治工具の設計製図等に、学校教育が大いに役に立った。

よく、千工の生徒が工場見学に来て、学校の勉強が社会でどれ程役に立つのだろうかと質問されたが、私の場合100%役に立ったと言える。

会社での生活40数年、たかが3年間の高校時代を懐かしく思うのは何故なのか、同窓会の原点がこの中に存在するのではと思うのである。

東葛支部創立五周年を迎えるにあたって

副支部長　32E　吉田　勝彦

年齢を増す毎に、時計の針も高速回転するようです。

定年退職してから早くも五年経過。東葛支部も平成16年6月には創立五周年を迎えることになりました。記念式典を6月に開催する予定です。

特に2年間は副支部長という大役を拝命しながら会員皆様のご要望を盛り込み、変化に富んだ活動内容であったかどうか…「反省」。

そしてこの1年間の反省の中から私は最近こんな事を考えています。

一般的に60代、70代と言えば一生懸命人生の坂を登って来た訳で、これからは余裕を持ってゆっくり自分の坂を下って行く事が大切だと思います。

事実、病に倒れる人も多い、これからこそ周りを気にせず、良い意味でマイペースで、辺りの景観を楽しみながら、ゆっくり歩いて下れば良い。

我々はともすれば頑張ることを第一に考え、すべてのことに余裕が持てない世代であった様です。

もっと肩の力をぬいてリラックスする事が大切だと思います。坂を下ると言っても、マイナス思考ではなく、スピードを出し過ぎて転がったりせぬ様に、上手に坂下りをする事です。

途中横道にそれたり、時間を気にせず（だからと言って集合時間に遅れたり、約束を守らない事ではありません）、沿道の草木、花、野鳥等を楽しみ、遠く眼下の眺望を愛でて、とにかく無理する必要がない。

あくまでも自分本位の、自分の為のものでなければいけないと思います。

しかし、出来れば一緒に楽しみ、助け合える良き友達、仲間が一人でも多くいた方が良い。

東葛支部に入会したことにより、その友達作りが出来ていること。これが私の喜びであります。

これからは、出来るだけ時間にとらわれず、あれこれ寄り道をしながら好きなことをやり、無理をせず過ごしたい。

“年金は”今後どうなるんだろう、なんて今、あまり心配する必要はない、「なったらなったで、その時、前向きに考えれば良いこと」と私は思っています。

今後も是非会員の皆様と一緒に楽しく有意義な時間を過ごしたいと願っております。

どうかよろしくお願い致します。

東葛支部に加入して

34M　土屋　孝夫

私は県外に移住して45年も過ぎ、現在は神奈川県川崎市に在住しております。

従って千工同窓会組織には無縁なもの、学び舎津田沼校舎も既に無く、ますますその存在が遠くなっていたものです。

定年も過ぎ、現実社会のしがらみも薄れ、自由な毎日を送っていたある日、同期で当支部幹事の坂巻氏のお誘いをいただいた時、このような組織は、一に親睦を主に活動しているだろうと想像しましたが、加入するメリットは何かと考えもしました。

メリットとは改めて調べると、利点、価値とあります。

その利点、価値は人から与えられるものでしょうか。

これは自分で探し身に付けるものだと思います。私の今までの人生、よく「タラ・レバ」が付いて来ました。

このタラ・レバは、結果が思わしくなかった時後で考えてみると、あの時こうしタラ良かったのに、こうすレバ良かったのにと、良い結果でなかった時の、言い訳の一つではなかったかと思います。

従って、気持ちの変わらないうちにと加入させて頂きました。

入会後半年が過ぎた今日、支部活動には総会、忘年会、ゴルフ同好会と、まだ3回しか参加しておりません。

これは隔たった距離と趣味の事もあります。入会して先ず感じた事は、支部幹部の方々が温かい気持ちをもって受け入れてくださった事、また組織維持向上に力を入れている事がわかりました。

同窓生というだけで、変なしがらみを感じる事もなく、昨日迄全然知らなかった方々と親しく語り合う事や、一緒に行動したり出来る事が、こんなに楽しい事かと改めて思い直しました。これが最大のメリットだと私は思います。

12月には忘年会とゴルフ同好会に参加させていただきました。忘年会は新浦安の「やるき茶屋」で2時間飲み放題です。開催とともに魔法の液体は参加者の方々の気持ちをほぐし、和やかな宴会となりました。

中にはビール・お酒・ワインと三種混合の方もおられ、諸先輩の元気な姿を拝見いたしました。皆さん色々な社会でのご活躍、その世界では玄人はだしの腕を身に付けて居られる方もおり、同じ工業高校出身とは思えませんでした。有志での二次会カラオケで盛り上がり、楽しい時を過ごす事が出来ました。

ゴルフでは名門の「船橋カントリークラブ」でプレーして来ました。私の腕は大した事はありません。でもゴルフ大好き人間ですから、1回でも多くゴルフ場へ足を運びたいと思っているのですが、いつも終了後「タラ・レバ」の登場です。これがまた長続きする秘訣かも知れません。

人は一人では生きていけません、これからも出来る限り行事に参加して、より多くの方々と語り合い、行動して行きたいと思っております。

どうぞ支部の皆様方今後とも宜しくお願い致します。

東京・神奈川在住の方々への呼びかけ

当支部では、本部の了解のもとに、地理的に近い東京や神奈川、あるいはその他の近県の同窓生の皆様に、東葛支部へ入会していただくよう呼びかけを行っていますが、先般、神奈川在住の「土屋孝夫」さん、「吉田典昭」さん（共に34M）がご入会されました。

支部では、これを機会に更に多くの方々に入会して頂くため、東京、神奈川在住の、昭和23年～53年までの卒業生110名を対象に、吉田さん作成のお誘い文と、それに同封した、立崎支部長の要請文を掲載します。

千葉工業高校同窓会への加入のお誘い

謹啓　ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

突然お手紙を差し上げる失礼をお許しください。甚だ不躾ながら、東京、神奈川在住の同窓生の方々に千葉工業同窓会（以下千工同窓会）への加入についてご案内させていただきたいと思います。

最初に自己紹介させていただきますが、私たちは、土屋孝夫、並びに吉田典昭と申します。ともに昭和34年機械科を卒業いたしました（34M）。両名共に神奈川在住です。

縁があって、昨年千工同窓会の「東葛支部」に入会させていただきました。

現在、千工同窓会は千葉県内に9支部あり、それぞれ活動が行われております。まだあまりよくは理解してはおりませんが、支部間の交流も活発に行われているようです。

残念ながら、県外にはまだ支部がありませんので、私たちは加入をあきらめていたのですが、聞けば「東葛支部」は東京や神奈川に近いこともあって、千工同窓会の了解のもとに積極的に同地区在住の同窓生を受け入れているということを知り、加入させていただいた次第です。

ひと口に同窓会と申しましても、千工同窓会の本部とだけでは繋がりが希薄で、世代を超えた同窓生と親しく懇談したり、各種の行事に参加したりということになると、やはり「支部に加入する」ということになります。

「東葛支部」の年会費は3,000円で、加入手続きをされましても2004年4月からの分（次年度分）を払い込めばよいとのことですので、是非ともご検討下さいますようお願い申し上げます。

なお、本来ならば東京と神奈川で支部を設立出来るといいのでしょうが、横の連絡もない状態の現在、一足飛びに実現することは無理だと思われます。やはり、今ある支部に参加して横の連絡を形成していく中から、将来、この地区にも支部が出来ればよいと考えております。

末筆ながら貴方様のますますのご健勝とご活躍を祈念申し上げます。

千葉工業高校同窓会への加入のお誘い

東京、神奈川の千工同窓生の皆様、私、東葛支部長を仰せつかっております立崎作次（28C）でございます。

別紙で土屋　吉田両氏が述べておりますように、当支部では本部了承のもとに、地理的な近さもあって特に東京、神奈川にお住まいの同窓生の皆様のご加入を大いに歓迎しておりますので、是非ともご入会くださいますようお待ち申し上げます。

なお、東葛支部の年会費は3,000円ですが、今加入手続きをされましても次年分（2004年4月～2005年3月分）からのお払い込みで結構ですのでよろしくお願いいたします。

これを契機に当支部の活動をますます盛んにし、皆様のご期待にお応えできる有意義な支部になりますよう努力してまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

サザンプトンでの教授生活一周年の成果

29E 吉田 靖

2002年の本邦海軍記念日に英国へ出張した。

ロンドンの日本大使館で大使付武官に入国の挨拶を済ませ、サザンプトン市西部のウェセックス工科大学に到着した。

学長はじめ教職員に赴任の申告の文案を思案したのに、出迎えは今後指導する大学院生のみと拍子抜けした。彼らは「今日はバンクホリデー。教職員は不在」という。「銀行の休日か」と問いただすと彼らは笑い出し、「女王のご成婚六十周年記念日の休日」という。

バンクホリデー「休日」を知らなかったので失態となってしまった。

モーターボートの抵抗等について週一回九十分の授業内容を英語で暗唱して教鞭をとるのは大変なことである。

いしだあゆみも役所広司も各々歌いや劇団四季の出身であるが、ドイツ人に勝るとも劣らないドイツ語を映画「アナザウェイ」で話しているのを想起し、筆者も授業の英文の暗唱に力を注がねばいけないと思った。

まだ大学教授として苦しいことは論文発表しなければならないことである。一点の論文発表の審査に合格することは至難のことであるが、筆者は学長から少なくとの一点の論文発表が課せられた。

ノルウェーのベルゲンでのフランスの学会、サンクトペテルブルグでのロシア学会、バルナでのブルガリアの学会、及びロンドン、上海及びポーランドのスチェーシンでの英国の学会が主催する各地での国際会議において、筆者は合計八点の論文発表に成功した。

前記国際会議において、筆者が学会首脳部の委員会委員の委嘱を受けて、論文審査員やセッションの議長をつとめた学会もある。特にブルガリア共和国バルナ市での国際会議は筆者の一身上の変化をもたらした。

バルナ工科総合大学が本会議の幹事となったが、同大学は創立四十周年記念日を迎えていた。記念行事として、同大学教授会は名誉教授を十数名選定した。末席ながら筆者は名誉教授の称号を受けた。

帰国後の今、前ウェセックス工科大学かバルナ工科総合大学名誉教授か思案中です。

赴任先英国の王立造船学会が筆者に対し、ロンドンと上海での両論文発表を認めたことは、筆者の最も欣快とするところです。

特にバッキンガム宮殿裏にある王立造船学会本部講堂での講演では、論文の暗唱や予想される質疑応答の準備に万全を期したものの、本場の英語を話す英国人が多く集まるので緊張した。

講演は成功し、2003年の4月に上海でも当論文を第一セッション（初めのセッション）で講演する旨の依頼を受けた。

折も折、香港で新型肺炎が流行中であったが、筆者を抜擢する王立造船学会のために働くのは本懐、筆者は欣然と英国から上海に飛び、その任務を果たした。

前記武官中尾典正海軍大佐（防衛大26期生）に申告、英国での成果を報告した。

本年は日英同盟百周年に当り、大佐は英国の外務省や海軍等の主催するその記念行事に招かれたとのことであるが、特に胸を打たれたこととして次のことを述べていた。

百年前の東郷元帥の写真と記念の小品がていねいに保管された状態で武官に提示されたときに感動したとのことである。

大使館を去り、英国の東海岸へと向かった。

ハービッチ港から乗船、同港外で英国本土に別れを告げた。思えば当地も第二次世界大戦初頭に英独航空戦の舞台であった。海路ドイツへ上陸した。

ハンブルグで二つの施設を見学した。一つは世界に名高いハンブルグ水槽ともう一つはその付近の大学。大学はハーブルグハンブルグ工科総合大学という名である。

このH.Hの中身は一文字異なる似たつづりで〔注〕、ハンブルグ市のはずれにこの地名は存在している。

その後、列車旅行を続け、ベルリン経由でスチェーシンに到着した。スチェーシンは1945年からポーランド領となったが、第二次世界大戦中はドイツのUボートを製作していた土地である。

当地で二点の論文を発表後、ワルシャワを観光して、空路日本への帰路についた。

〔注〕Harburg-HamburgをH.H.と記した。

幕山、南郷山へのハイキング

（同窓会レクリエーション委員会主催）

26C　立崎　作次

12月4日（木）、マイクロバスをチャーターした一行は、千葉から12名、西船橋から5名（東葛支部4名）を加え17名の参加でした。

箱根連山の一部である標記の山々への期待と、久しぶりの山登りへの魅力とが重なりバスの中は賑やかになりながら、一路目的地へと向かった。

絶好のハイク日和の好天気に恵まれ、早速登山開始した。

まずは、幕山公園にて記念撮影を行い、青春時代を思い出しながら登山開始した。

途中、若者達のロッククライミングのトライ状況を見ながら、ジグザグした梅林の中を進んだ。625mの比較的楽な登山であるが、12月とは思えない暖かさと次第に疲れも出て、いつの間にかお喋りも少なくなっていた。

途中、3度の休憩をとり、春のようなハイク日和、林間の垣間から望める真鶴半島を仰ぎ見ながら、一路、頂上へと歩を進めた。先頭から、おーい幕山頂上だ！ 着いたぞ！ と歓声をあげ、全員、無事、頂上へ到着した。

箱根連山、真鶴半島を一望にした360度のパノラマの絶景は本当に素晴らしく、クライマーの特権であり、青春時代に返ったような気分を味わった。

絶景に恵まれた頂上での昼飯は、お腹の空いているのと相まって本当に美味しかった。

一時の休憩を楽しんだ後の帰路は、登りとは全く異なり、若干、膝の心配はあるが、アッという間に、南郷山への登り口に下ってしまった。

幹事が、50m程度の直登山になるが、皆さん頑張りましょう、と激励の言葉のもと、本日の一番の難コースに挑んだ。4名リタイアしたが、残りの全員（女性2名含む）は、縦走となる南郷山を無事制覇した。

さすが50mとはいえ直登はきつく、全員が、汗びっしょりになった。

特に、重量級の〔I〕さんは、その量が多かったようでした。この汗により、更に、仲間意識が醸成され、千工会の絆が倍加された感じがした。

下山は、足取りが早く、瞬く間に、スタート地点へ到着した。

帰路のバスの中は、途中、幹事が下車して買い入れた飲み物（ビール、酒、ジュース、つまみ等）が配られ懇親会場に変わった。

特に、後部8人掛けサロン席は、定員オーバーになるほどになり、最高に盛り上がった。この素晴らしい雰囲気こそ、千工同窓会の結束力の固さを証明しているものと実感した一時であった。

バスは、帰路は早く、お喋り時間が足りないと、思わせる程の間に西船橋へ到着した。東葛支部グループは、お名残りを惜しみ、又の再会を約して、それぞれの家路に就いた。

東葛ウオッチング

その7「松戸市」(2)

松戸と千葉周作

千葉周作は、陸前国栗原郡の馬医者、幸右衛門の次男で幼名を於兎松といいました。父幸右衛門は、義父直伝の北辰夢想流の達人でしたが、故郷を離れて松戸に馬医者として居を構えました。

松戸には、中西派一刀流の浅利又七郎の道場があり、周作はこの道場に通って腕をあげましたが、23歳の時、又七郎の師である中西忠兵衛の道場で修行すべく江戸へ出ました。江戸で名をあげた周作は、中西派免許皆伝の許しを得ましたが、間もなく、師である又七郎の要請で松戸へ帰り浅利道場で教えることになりました。道場には江戸での周作の人気を知る入門者が大勢おしかけたそうです。

その後、彼は独自の「北辰一刀流」をあみ出して北関東から三河まで、城下町の道場を虱潰しに破り、北辰一刀流と千葉周作の名は全国に知れ渡りました。

江戸に戻った周作は、神田お玉が池の近くに道場をたてて「玄武館」の看板をかかげましたが、後に「坂本竜馬」や「清河八郎」もここで学ぶことになります。また、浪曲「天保水滸伝」に登場する剣客「平手造酒」を歌った田端義夫の名曲「大利根月夜」にも「腕は自慢の千葉仕込み～」という一節があります。周作は玄武館のかたわら、水戸藩の藩校「弘道館」の師範もつとめていましたが、安政2年、62歳でこの世を去りました。墓は、豊島区巣鴨の「本妙寺」にあり、父幸右衛門と浅利又七郎の墓は、松戸二町目の「宝光院」にあります。

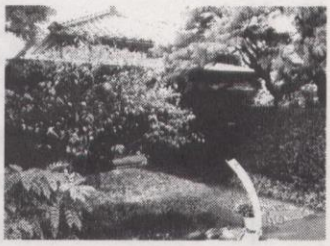
常磐線の沿革

明治23年、日本鉄道会社の「水戸鉄道」が開通しました。日本鉄道では、すでに開通していた現在の東北本線「小山」を経由して常磐炭坑の石炭を東京へ運んでいましたが、小山経由ではかなりの迂回となる為、水戸線の「内原」～川口間へ鉄道を建設する計画を立てました。

この計画では「土浦線」となっていましたが、その後政府から上野を起点とするよう指示があり、水戸線との接続も「内原」から「友部」に変更して明治38年に完成、明治42年に「常磐線」と名を変えました。

昭和11年、松戸まで電化、取手まで電化されたのは昭和24年です。

戸定歴史公園と戸定館



歴史公園のなかにある「戸定館」は、水戸徳川家第十一代藩主「昭武」公(最後の将軍徳川慶喜の弟)が、景勝の地「戸定ヶ丘」を大変気に入り、自分の余生を過ごす目的で、明治17年に建築した建物です。

昭武公は、慶応3年、パリで開催された第二回万国博覧会に慶喜の代理として出席、獨、英、露に学んだ後明治元年に帰国、その後、明治7年に渡仏して14年に帰国したヨーロッパ通で、その為か、庭園は洋式を取り入れた、当時としては大変珍しいものです。

この屋敷は、子息「武定」氏によって昭和26年松戸市へ寄付され、その際に「戸定館」と命名されました。

戸定館の近くには歴史館もあり、一体は「戸定ヶ丘歴史公園」(表紙)となっていて、眼下に江戸川を望む景勝地です。

また、隣接して「千葉大学園芸部」の広大な森林が広がっていて、森林浴が楽しめます。

場所は、松戸駅東口を出て右へ約10分程歩いた所です。

二十世紀梨と松戸

二十世紀梨の発見は明治21年にさかのぼります。

松戸在住の13歳の少年、「松戸覚之助」が親戚の裏庭で小さな梨の木を発見。父が経営する梨園「錦果園」へ移して育てたところ、10年目に実が生りました。

この実は今までにない薄緑色で、皮が薄くて柔らかく、甘く、多汁で大変美味しい梨でした。

この梨は、「渡瀬寅次郎」農学士によって「二十世紀梨」と命名されましたが、黒斑病に弱く、栽培者は大変苦労したそうです。

この梨を全国的に有名にしたのは鳥取県でした。

鳥取の旧家に生まれた「北脇永治」が、明治37年、苗木10本を錦果園から購入したのが始まりです。

ほかにも、いくつか栽培を試みた県がありましたが、鳥取県では、黒斑病を克服する為、防除の全県組織を作り、栽培面積を広げて全国一の二十世紀梨の産地となりました。

現在、松戸には「二十世紀梨原木跡地」の碑があり、鳥取には「木の実神社」があって、松戸から移植した原木をご神体として奉祀しています。

ハゼ釣りバーベキュー大会

東葛支部恒例のハゼ釣りバーベキュー大会。

昨年も10月5日に行徳の江戸川放水路河川敷で行いました。

地下鉄東西線の鉄橋近くに、いつもの様にタープを張り、イス、テーブル、レンタルしたガスボンベとガスコンロ、なべ、鉄板と、用意万端。

天気が良かった為、沢山の釣り船が出ていましたが、我々はそれを尻目に早速宴会の準備。

東西線に新駅が出来たお陰で、この辺もずいぶん開けてきて、大きな量販店やスーパーがあり、調達がずいぶん楽になりました。

野菜と椎茸、肉の鉄板焼と豚汁で先ずは乾杯。

ビール、日本酒、焼酎などで思い思いに飲っていると突然のちん入者あり。少し離れた場所で、息子さんご夫妻やお孫さん達とやっていたご夫妻が、飲み物と「あさり」を持参して仲間に…。

聞けば、駅の近所で「銀ちゃん」という飲み屋さんをやっているとのこと。

このご夫妻、大変愉快で話が弾み、とうとう夕方になってしまいました。

あさりは、今話題の「三番瀬」で取って来たものとか。

持って行け、持って行けと、ビニール袋一杯のあさりを土産に帰宅。夕食はあさりの味噌汁となりました。

支部忘年会

12月7日、京葉線新浦安の「やるき茶屋」で、支部忘年会を開催しました。

川崎から土屋会員も参加。総勢18名で飲み放題。食べ物も結構あって、まあーまあー満足。

吉田副支部長の漢字クイズで頭をリフレッシュしながら懇談。

二次会有志は、カラオケBOXで歌いまくりました。

岡村副会長ご逝去

千葉工業同窓会 副会長 岡村　努さん（18M）が、去る9月20日77歳でご逝去されました。

岡村さんは機械科1回卒の大先輩ですが、北総支部の初代支部長を経て、本部の副会長として、また財団法人千工会の副理事長として、永年にわたり千葉工業同窓会のために活躍され、貢献されました。

ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

皆様の趣味や得意とするものをご連絡下さい。

会員の皆様は、色々な趣味をお持ちだと思いますが、比較的ポピュラーと思われるものについて、役員のなかで一応の担当者を決めてあります。会員の皆様のご趣味・得意な分野・特技などを把握し、色々な行事や交流にお誘いしたいと考えています。趣味や得意な分野が一致した方は、それぞれの担当者までご連絡下さい。

●ゴルフ	櫻井　一三	〒279-0022	浦安市今川4－8－7	TEL.047-352-5569
●ハイキング	木間　英一	〒270-0002	松戸市平賀125－10	TEL.047-343-0455
●囲碁・麻雀	高橋　健一	〒270-0157	流山市平和台5－400	TEL.04-7159-9367

今後の予定

●当支部の予定

1月25日(日)　幹事会
3月17日(水)　支部ハイキング
4月18日(日)　幹事会
6月13日(日)　第6回定期総会

●本部・他支部の予定

1月24日(土)　千葉西支部定期総会
3月14日(日)　南総支部定期総会
4月11日(日)　外房支部定期総会
4月4日(日)　千工会　同窓祭
5月9日(日)　京葉支部定期総会

新入会員募集と入会手続きについて

東葛支部では、会員を増やしてどんどん組織を大きくしていきたいと思っています。このため、役員の中に「会員増促進委員会」を作って活動しています。

会員の皆様の仲間で、会員資格のある方がいらっしゃいましたら、ぜひ入会を勧めて下さい。

1. 入会資格　千葉工業学校、千葉工業高校、および同校併設中学校の卒業生、ならびにかつて同校に在勤、在学していた方で支部長が認めた方。
東葛地域に居住している方、または出身が同地域の方、同地域に勤務されている方。

2. 会　　費　年会費　3,000円

3. 入会手続　役員へ入会申込みされますと郵便振替用紙をお送りしますから、年会費3,000円を振込願います。

支部会報第10号の原稿募集

東葛支部会報第10号の原稿を募集します。

1. 発行予定　平成16年6月

2. 原稿締切　平成16年5月

3. 内　　容　母校の思い出・恩師の思い出・私の職場・私の仕事・私の趣味・私の特技・旅日記・近況・クラス会模様・エッセイ・呼びかけ・イベント報告　等、何でも結構です。

4. 投稿方法　卒年科・ご氏名を記入の上、郵便・FAX（自動受信）・E-mailのいずれかでご投稿下さい。

5. 投 稿 先　編集委員長　住 田　敏 和　〒:279-0026　浦安市弁天三丁目2-68-5
TEL/FAX:047-355-2314　E-mail:info@sunfamily.co.jp

東葛支部会報

第9号

発　　行	平成16年2月1日	
発 行 者	千葉工業同窓会　東葛支部	
発行責任者	支　部　長	立崎作次
事　務　局	事務局長	木間英一
編集責任者	編集委員長	住田敏和